

## 総合的な学習と教師

- K小でのフィールドワークを事例として -

### 私の研究とフィールドワーク

私の研究テーマは、教師は総合学習をどのように作り上げているか、である。より詳しくいえば、教師は、自分が置かれた環境、自分が持つ実践の経験、自分は経験していないが、すでに先行して行われた実践の事例などの知識、自分以外の他者、すなわち他の教師や子ども、総合学習で協力を仰ぐ人々、その人たちとの関係、新しい技術、すでに教師にとって切り離すことが不可能な道具、などなど、さまざまなリソースを参照して、総合学習を作り上げる。その過程で、教師たちは、どのようなリソースをどのように参照して総合学習を作り上げているのかを、教師らが総合学習をデザインする場面の分析をもとに明らかにしたい。

最近では、至るところで、総合学習に関する授業研究会が開かれ、多くの来場者を集めている。文部省は、新設される総合的な学習の時間は、学校ごとの学習の状況に応じたものとするを徹底するために、次期学習指導要領の作成にあたって、あえて、具体的な活動の事例や盛り込むべき内容を記述することを避け、教師が自ら、「子供たちの発達段階や学校段階、学校や地域の実態等に応じて、各学校の判断により、その創意工夫を生かして」(第15期中央教育審議会第一次答申)展開することを期待した。しかし、昨年、文部省がしぶしぶ(?)出版した「総合的な学習の時間」での活動の事例集は、当初の予想を越え、多くの教師に受け入れられ、たくさんのオーダーを抱えているそうである。

「総合的な学習の時間」という未経験、かつ捉えようのない時間枠に対応するために、総合学習の実践として有名な学校の事例を集め、活動として面白そうなものを選び、多少、自分たちの学校で可能なようにアレンジして、なんとか間に合わせよう、という教師の姿がそこに見える、というのは、言い過ぎだろうか。あるいは、教師は、教職になる前も、現在も、文部省や教科書によって学習内容や学習目標が明確に定められ、その範囲内で教えることしか、学んでおらず、おのずと、授業を作る上で参照すべきリソースも限られていたのではないか。極端にいえば、教科書と教科書の手引きだけで、職員室から教室に向かう間に、授業ができてしまう、というように。

文部省が意図しているかどうかかわからないが、「総合的な学習の時間」の新設は、そうし

た教師の姿勢に反省をもとめ、「各学校の判断により、その創意工夫を生かす」ために、教師がともに子どもたちの学習状況や生活状況、教師自らの経験や、信念、知識をもとに、独自の活動内容を作り上げ、学校や子どもたちを取り囲むさまざまな人たちの協力を受けながら、学習を行い、その結果をもとに、再度、反省的に学習活動を練り上げていくことが求められているのではないか。つまり、総合的な学習の時間の実践を作るうえで、教師は、教師を取り囲むさまざまなリソースを参照しつつ、教師と他者とのさまざまな関わりのなかで、反省的に実践を作り上げる必要に迫られている。

現在、私は、1992年より総合学習を取り入れ、授業実践の研究をすすめている、M市立K小学校において、総合学習と、教師集団によって、総合学習が作り上げられる場面のフィールドワークを行っている。週に一度、学年担任と同和担当教員が集まり、学習の進捗状況の確認や指導方法の検討、教材の開発・検討などを行う学年会において、総合学習の計画が立てられる。私は、その場に立会い、フィールドノートをつけている。

本研究会では、「総合的な学習と教師」というお題を頂いたが、研究会のテーマは「情報化の中の教師たち」ということで、今回、総合学習の場面で情報に関連した総合学習の場面の分析を行うことにしたい。そこで、K小の2人の教師にとって新しいテクノロジーを用いた活動であった「メールボランティアとのメール交換」の場面の分析を行う。テクノロジーに長けているとはいえない教師ふたりが、いかにして授業を設計し、子どもたちや教師や子どもたちの技術サポートを行うパソコンボランティアと関わり、授業を行ったのか、その過程を分析することで、「情報化の中の教師たち」が突き当たる問題や、メールボランティアや操作ボランティアといった教師以外の人材が教師、子どもと関わるなかで起る作用について、考えていきたい。

## 総合学習におけるネットワーク利用の意図

「子どもたちは、夏休みに地域や旅行先などで発見したことなどを、「ランラン発見カード」に記入してきた。それをもとに、箕面市メールボランティアのみなさんに電子メールを使って伝えるという活動を設定した。相手にわかりやすい文章を書くとか、パソコンに入力するといった、今までの練習の中で身につけた力を発揮する場である（99年度K小学校府教委向け加配要求申請書，教師W担当ぶんより）」

教師らは、夏休み前、7月の学年会において、9月からの「メールボランティアとのメール交換（ランランメール）」について話し合った。以下は、私のフィールドノートの抜粋である。

7月2日：学年会での教師Kの発言

質問したりするときに便利なものとして、メールを位置付けている（私の感想）。質問したら、わかるかもしれない。送ること、質問して聞くことをいっぱい体験させたい。いろいろ質問して、返ってきたらいいね。質問したら、返事が返ってくるんでしょ？どんな人がボランティアをしているの？（ボランティアのリストを見て）子どもが興味を持ちそうなことをやっている人ってすくないね。

同日：学年会でのW先生の発言

全体でやらなくていいけど、何人かが続けていけばいい 地域のことを発信するから、そのあたりの花のことなどについて、うろうろしていればいい。

教師Wは、コンピュータやインターネット利用の経験がながく、メールを使える同僚らと近況を報告しあったり、昨年度まで所属していた大学院時代の仲間たちや、指導教官らと、現在取り組んでいる総合学習について議論しあったりしている。また、大学院では修士論文として、国語科の学習のなかで、メールによる学校間交流を取り入れた授業について研究を行っており、メールを用いた交流がおおよそどのように発展するかについて、活動の前のいわゆる「しかけ」、先行した実践を今回行う実践にどのように位置付ければいいのかについて、おおよその見通しを立てていた。Wはしばしば、「練習・練習試合・試合」という例で、総合学習をたどっている。基礎的な力を練習で養い、練習試合で、その養った力が出るような課題をこなしつつ、そこで弱点やのばすべき力を見極め、再度練習を行い、試合としての活動の本番に臨む、というものである。Wらの3年生は、総合学習の「ねらい」を以下のようにあげている。

- ・学校・地域の特徴や、それらをよくするための取り組みについて調べ、自分たちも何らかのかたちで学校や地域をよくしていくための動きをつくり出していく。
- ・発見したことや調べたことを伝え合うことによって、交流する楽しさを味わう。
- ・互いのよさに気づき、認め合いながら、共に様々な活動に取り組む。

ねらいのなかで、メールを用いた交流は、ねらいのうち1の「学校・地域を調べる」と、2の「伝え合うことで交流する」ことを含んだ活動だといえる。そして、「ランランメール」は、Wのいう「練習・練習試合・試合」の「練習試合」に位置している。すなわち、まず、練習としての学年内での「なまえ作文」を通したやりとり、練習試合として、「ランランメール」では学校外の人材とのやり取りをはじめ、本番として卒業生らとのやり取りを設定している。

Wは、練習試合としての「ランランメール」を「何人かが続けていけばいい」として、ボランティアと子どもたちとのメールのやり取り自体には、持続性をそれほど期待せず、子どもたちの表現の可能性の1つとして、メールによる交流をとらえている。しかし、K

は、学年会での発言より、「ランランメール」での交流相手であるボランティアを、子どもたちの（あらゆる）質問になんでも答えてくれる相手として認識（あとの方になって、子どもの期待に答えることが可能なようなボランティアが少ないということに気づくが）し、子どもにとって、「練習試合」を経験することで、交流がうまくいかないときもあることや、交流するには自分たちはどのようにやり取りをしなくてはいけないか、ということ子どもたちに考えさせる、ということ考慮にいていない。この点が、後々のコンピュータを使ったメールを書く場面において、障害となって現れてくる。

## ネットワーク利用の実際

ここでは、「ランランメール」の活動場面の分析を行う。活動場面の分析は、Engeström, Yらの活動システムを用いておこなう。杉本ら（1999）によれば、活動システムによる活動の分析の利点は以下のとおりである。

- 集団的な活動の歴史性や活動内部の複雑な事象を、構成要素と構成要素が相互に結びつき、作用しあう活動のモデルとして整理できる。
- 活動の変化の源となる活動を構成する構成要素間の矛盾と、その矛盾を解消し活動の発達に向かうありさまを把握することが可能となる。

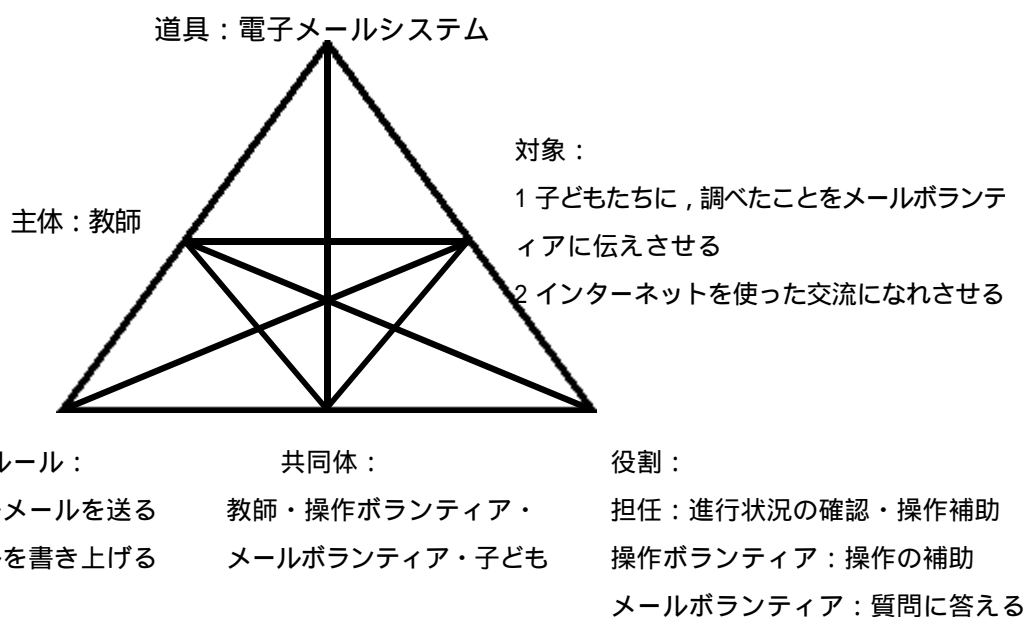
「ランランメール」の活動にボランティアとして関わったのは、M市教育センターがメールボランティアとして募集したボランティアのうち、活動の趣旨に賛同した46名である。ボランティアは、それぞれ得意とするものや趣味をいくつか挙げているが、必ずしも、子どもたちが関心を持つようなものを挙げているボランティアは多くない。担任は、活動にあたって、それぞれの子どもがメールをやり取りするボランティアを子どもたちにあげさせたが、多くの子どもたちが関心をもつ昆虫や動物について答えることができる少数のボランティアに、子どもたちの希望が集中し、じゃんけんで希望がかなわなかった子どもは、泣き出すほどであった。

また、コンピュータに不慣れな教師2名をサポートするために、筆者は操作ボランティアとして、2人の教師が「ランランメール」の活動のうちの、子どもたちによるメール入力の活動に参加した。

子どもたちは、夏休み前に「ランラン探検カード」を教師より手渡されており、そのカードに夏休みに調べたことを書いている。夏休みに育てた植物のことや、動物のこと、食べ物の話や、身近な地域、生活の話などである。1学期には、総合学習で、地域の植物について調べたり、2学期からの総合学習として地域の伝統行事や地域活動を取り上げる予定だったので、「ランラン探検カード」を子どもたちに配るにあたり、例として、そのあた

りのことについて調べてくることを教師は言ったが，その期待に答えてきた子どももいれば，まったく違うことを調べてくる子どももいた．まったく違うことを調べてきた子どもに関して，子どもたちの関心のあることを子どもたちなりにいろいろな手段で調べたことを「ランラン探検カード」の目標としていたので，問題がある，というわけでもない．

「ランランメール」活動を行うにあたり，学年会において，当初計画された教師の側の活動システムは図1としてまとめることができる．ルールにおいては，子どもたちには，



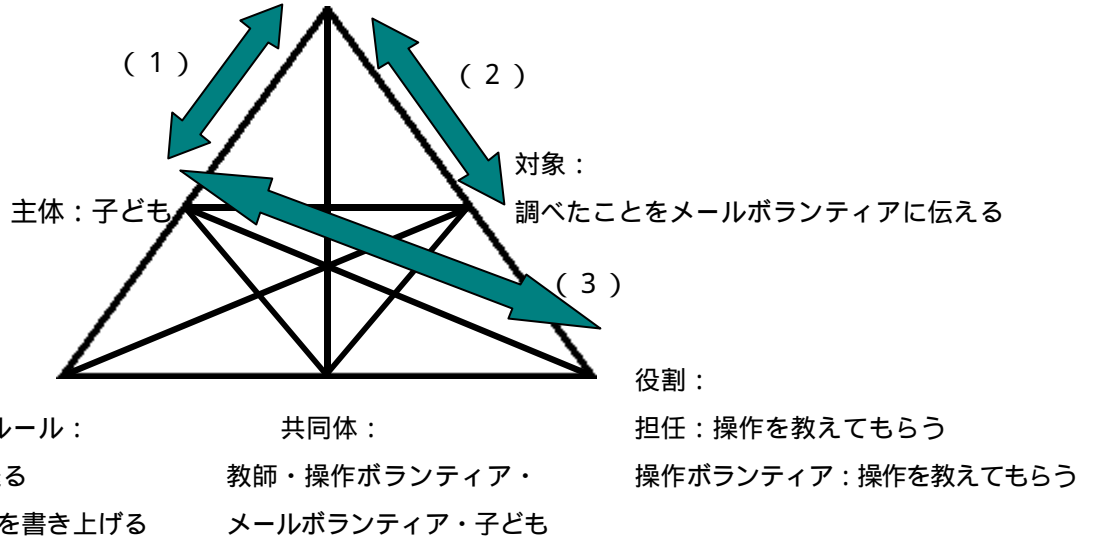
活動にあたっての教師の活動システム（図1）

まず全員にメールを使った交流を体験させ，その後は，子どもたちとメールボランティアとのやり取りが子どもたちになじめば交流を継続すればよいし，もしそうでなければ，無理にメールを使って交流することはない，子どもたちそれぞれにまかせるが，子どもからメールボランティアに対してメールをだし，その返事をメールボランティアよりもらい，それに対して，子どもの側がつけたしや感想のメールを書く，という最低限度のやり取りが今回できればよい，というスタンスをとることになった．また，当初，操作ボランティアを交えて，学年会において打ち合わせを行った際，総合学習ばかりに時間をかけることができない事情があったため，「ランラン探検カード」の内容を手紙にしてメールでおくるためにわずか1時間の時間設定しか行えなかった．子どもたちに対して普段からメールを書く環境に慣れさせていたWにとっては，1時間，子どもたちが一斉に行う時間を設定すれば，子どもたちが放課後や休み時間といった空き時間を利用すれば，メールを書き上げることができるだろう，と予測してそのように時間設定が行われた．

活動にあたっての教師の活動システムがある一方で，子どもたちの活動システムは，図2としてまとめることができる．教師の活動システムとことなり，子どもたちには，道具として，夏休みに調べてきたことをまとめてきた「ランラン探検カード」がある．子ども

道具：

- 1 電子メールシステム
- 2 「ランラン探検カード」



#### 活動にあたっての子どもたちの活動システム（図2）

たちにとって道具として「ランラン探検カード」があるのは、「ランランメール」の活動では、メールを書く際に「ランラン探検カード」を参照しながら、調べたけどわからなかったことや調べての感想をメールボランティアに伝えるための文章に変換する必要があるからである。ある子どもはメールに

はじめまして。

わたしは、8月15日に、とつとりのおじいちゃんの家にあるかれたうめの木にはえた、さるのこしかけと言う、きのこのことについて、おじいちゃんに、教えてくださいました。そのことについてお知らせします。

さるのこしかけは、がんとする病気がいいそうです。ほかに、なぜ、さるのこしかけと、言うのかということも聞きました。

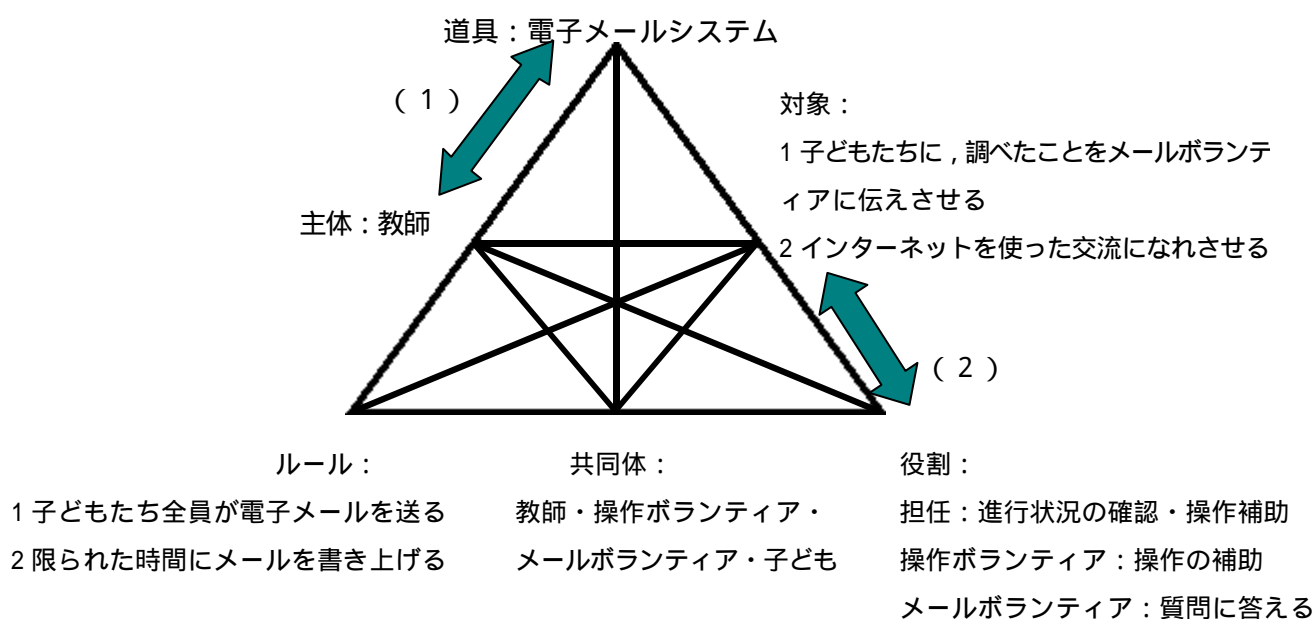
さるのこしかけは、さるがこしをかけているように見えるから、その名前がつけました。もし、おもしろいきのこがあったら、教えてください。

というメールを書いているが、「ランラン探検カード」には、「調べたこと」、「不思議に思ったこと」などの項目が立てられているだけで、メールの文体として「ランラン探検カード」を記入するようにはなっていない。子どもたちは、「ランラン探検カード」に書いた「調べたこと」や「不思議に思ったこと」から、メールボランティアに対して、調べたことを

伝え、質問するように文体を工夫する必要がある。子どもたちのメールを入力するという活動において、ここで大きな活動の「矛盾」につきあたる。メールにそもそもなれていない子どもが、道具としての電子メールシステムに慣れながら電子メールを入力するという作業だけでなく、限定された活動の時間内で、「ランラン探検カード」にかかっている事柄を、メールボランティアに質問の意図が伝わるように、また、ボランティアからの返事が期待できる文面に直さなければいけない、という作業が加わる。道具としての電子メールシステムと子どもたちとの間で、電子メールシステムになれていないことから、当然矛盾は発生する(1)ことを予想し、子どもたちが早く慣れる(矛盾が解消する)ように、子どもたちの操作を支援する操作ボランティアが活動に参加した。しかし、実際の活動では、予想を越えて、「どう書けばいいのかわからない」とか「最初に、はじめまして、って書くの?」といったような文面に関する子どもたちと問いが多く発生した(2)。活動を計画した当初は、そうした子どもたちに対する文面指導をまったく考慮に入れておらず、当然、活動当初に教師と操作ボランティアで文面指導の役割が明確に割り当てられていなかった。活動後の教師Kの言葉「(文章は)なんとかなると思ってたのんになぁ」がそれを裏付けている。

ここで、当初、子どもたちに電子メールシステムの操作方法を教える役割のみを担っているはずであった操作ボランティアは、文面指導の役割を子どもたちから期待された。操作ボランティアは、その役割に対応できるように振舞ったが、文面指導ばかりをできるわけではなく、同時に電子メールシステムの操作の補助も行わなくてはならない。操作ボランティアが、文面指導にかかわればかわるほど、本来の役割であった、操作補助の役割を十分に果たすことができず(3)、活動当初設定した「1時間で、およその操作になれること」は結果として不可能であった。

以上の活動の様子から、教師の活動システムは、図3のように矛盾が発生したといえる。もともと、Wをのぞいて教師らは、電子メールシステムになれているわけではなく(1)、

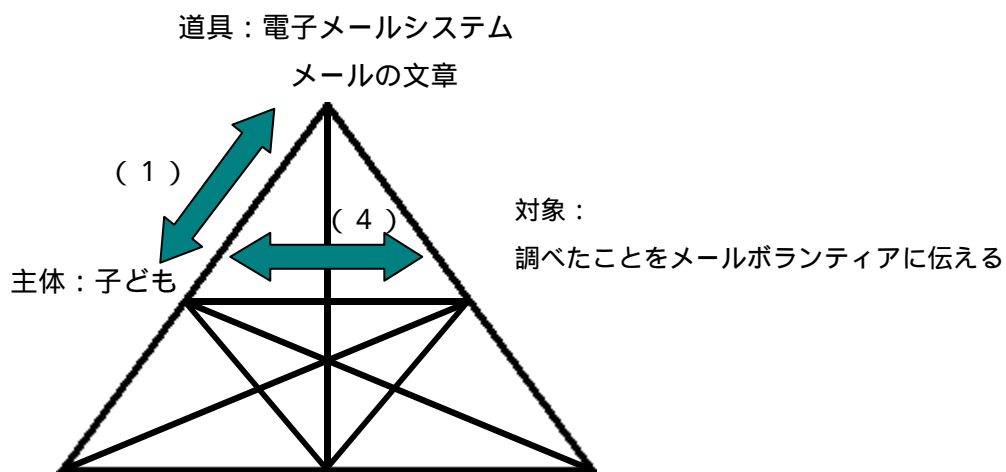


活動にあたっての教師の活動システム(図3)

それもあって、限られた時間内に子どもたちに操作方法を教えることは難しいと考え、子どもたちに操作について教える操作ボランティアに活動に加わってもらうことで、対象となる子どもたちの活動を実現させようと考えた。しかし、子どもたちは、活動のなかで、メールの文面の書き方について問題を抱える場面が多く発生し、当初計画した担任と操作ボランティアの役割は、子どもたちの活動に応じて変わらざるを得なくなり、操作ボランティアは、本来の役割である子どもたちの操作の補助を満足にこなすことができなくなった(2)。結果として、限られた時間内に子どもたちがメールによって、メールボランティアに対して調べたことを伝えることはできなかった。

このように1時間の限定した活動では、教師が対象として設定した「子どもたちに、調べたことをメールボランティアに伝えさせる」ことは、不十分に終わった。そこで、学年会では、操作ボランティアを交えて授業を終えての感想を話しあい、操作ボランティアからは、「子どもたちは調べ物を持ってはいたが、どのようにそれをメールボランティアに伝えればいいのか、わからないようだった」「時々、子どもたちに手紙の文面づくりについて聞かれ、どのように答えていいものか困った」「時間がかかるようなので、休み時間などにも出来る限り協力する」との感想と提案があった。操作ボランティアの感想と提案をもとに、教師らと操作ボランティアが話し合った結果、図4のような活動システムを想定し、まだ、メールボランティアにメールを書く活動を行っていない教師Tの教室で早速活動を行うことにした。

子どもたちは、相変わらず、電子メールシステムを使いこなすうえで時間がかかり、活



ルール：	共同体：	役割：
1 全員が電子メールを送る	教師・操作ボランティア・	担任：進行状況の確認・操作補助
2 <u>授業時数は2時間に限定</u>	メールボランティア・子ども	<u>メールの文面について事前指導</u>
3 <u>あき時間を活用する</u>		操作ボランティア：操作の補助
		メールボランティア：質問に答える
		<u>子ども：操作を教える</u>

活動にあたっての教師の活動システム(図4)



動の上で(1)の矛盾が観察されたが、教師が事前にメールの文面についての指導をおこない、メールの入力にあたっては、ただ調べたことやわからないことを記入した「ランラン探検カード」ではなく、メールの文面を記入した用紙を持参し、それを参照しながら、メールの入力を行っていた。そのため、操作ボランティアは、文面指導の役割から解放され、操作方法の指導に専念できるようになり、一斉指導と個別指導とを組み合わせながら、極力子どもたちの進行のペースがばらつかないように、指導することが可能になった。

指導が徹底したため、限られた時間内でメールの入力が終わらなくても、子どもたちだけであき時間にコンピュータ室に来て、自分たちだけで入力が続けられるように、一連の操作方法の習得まで、丹念に指導を行うことが可能であった。このことは、メールボランティアからの返事が来たときに、自主的にコンピュータに向かい、返事のメールに対するメールを書く子どもが多くみられたこととも関係があると思われる。また、操作ボランティアは、子どもたちや教師と付き合える時間にも限りがあり、一人ひとりの子どもに対して必要なときに必要な支援を行うことは難しい。そこで、メールの入力においては、2人1組のグループをつくり、メールの入力が終わった子どもは、まだ終わっていない子どもに教えるということを教師も操作ボランティアも薦めた。

このように、いくつかの矛盾が解消して、活動として成功したように見える「ランランメール」であるが、疑問が残らないわけではない。それは、活動の主体である「子ども」が、必ずしも、教師が設定した対象「調べたことをメールボランティアに伝える」ことに向かっていたのか、ということである(4)。子どもたちは、メールボランティアを想定して、メールを綴っていたというよりも、どうも、「コンピュータでメールを打つこと」を対象として活動していたように思えてならない。しかしながら、継続してメールボランティアとのやり取りを続けている子どももあり、総合学習の中でも調べ学習の成果などをメールボランティアに伝えたい、という子どもも現れたりする。だが、そうした子どもたちも、必ずしも最初から「メールボランティアに伝える」ことに向かっていたわけではなく、面白い返事がメールボランティアから返ってきたので、対象が「コンピュータでメールを打つこと」から「メールボランティアに伝える」ことに変化したのかもしれない。文面の指導でも、子どもたちは挨拶の仕方とか、メールの終わり方といった、メールを書くためのフォーマットばかりにこだわり、肝心のメールの内容についてどのように伝えたらいいのか、ということについては、子どもたちから操作ボランティアに対して、質問されることはなかった。今後、コンピュータを使った学習場面を分析する際には、その場面での子どもたちの活動の対象はなにか、また、子どもたちにとっての活動の対象が、活動が進むにしたがってどのように変化していくのか、追及していく必要があると考えられる。

## まとめ

今回、総合学習の場面で情報に関連した総合学習の場面の分析を行うということで、K小の2人の教師にとって新しいテクノロジーを用いた活動であった「メールボランティアとのメール交換」の場面の分析を行った。テクノロジーに長けているとはいえない教師ふたりが、テクノロジーを使うことを子どもたちに経験させたい、との思いから、技術ボランティアとかかわりながら授業を行い、授業での反省点を考慮にいれて、次の授業を設計しなおした過程が幾分か明らかになったかと思う。しかし、分析の最後にも述べたように、教師は技術ボランティアやメールボランティアといった外部人材を受け入れながら、授業を作り上げるのはいいが、新しいテクノロジーを総合学習に持ち込んだために、それに対応した授業づくりのみに追われ、肝心の子どもたちが活動の中で向かうべき対象について、教師らが自覚的であったのか、という疑問が残る。今回は、残念ながら授業でのコンピュータ活用の経験を多くもつWの授業には参加できなかったが、その後の教師らの話を聞くと、いまも断続的ではあるが、メールボランティアとの交流を続けている子どもは、Wのクラスの子どもだそうである。

今回のランランメールの活動は、Wのいう練習試合であるから、試合に向けて、徐々に子どもたちの活動の中で、対象が「相手に伝えること」、あるいは、ただ「相手に伝える」だけではなく、相手からの情報をもとに「考えること」へと発展していくきっかけになればよい、という言い方も可能かもしれない。だが、発展させるためには、練習試合で課題となったことを教師も子どもたちも振り返る時間なり、振り返るための方法なりが必要となってくるであろう。分析からも、新しい技術の導入は、当初、多くの混乱を生み出すことが明らかとなったが、それは技術の導入がすべての混乱の原因というわけではなく、活動の対象が、子どもの側も、教師の側も明確でなかったことが、混乱の原因であるように思える。よって、新しい技術は、それを用いて授業を行う教師にとって、本来めざすべき活動の対象を見えにくくする作用があると考えられる。

「情報化の中の教師たち」は、情報化に対応することではなく、活動本来の対象を見つめなおす必要に迫られているのかもしれない。